

パウロにおける「超越」と「内在」

—— ひとつの説教における考察 ——

青野太潮

以下の文章は、パウロにおける「超越」と「内在」についての問題の全体像を探ろうとするものではない。むしろこれは、私が2006年7月10日(月)の神学部チャペルにおいて、パウロ書簡の、とくに第二コリント13・1-10に基づきながら、「超越と内在」と題して説教をしたときの原稿を大幅に加筆訂正したものである。したがって、このテーマに関係するパウロの文言が網羅的に扱われているわけではないということを、最初にお断りしておきたい。しかし、そのテーマを神学部のチャペルにおいて私が取り上げたということは、それが「神学」にとって基本的かつ重要なテーマであると私が考えていることを意味しているので、その意味で「神学」に関心をもつ者にとって何らかの参考になり得るならばと願いつつ、まとめてみた。

「聞く耳のある者は、聞くがよい」(マルコ4・9、23)とイエスは言われたが、この言葉を聖書の中で読んだり、また耳にしたりするたびに思い出すひとつの出来事がある。それは、1971年に、私のスイス留学が決まったときに、当時国際基督教大学(ICU)において客員教授として二年間教鞭を執っておられたU・ルッツ(Luz)先生に電話でその合格のご報告をした際のやり取りのことである。ルッツ先生は今から二年前の2004年にも、スイスのベルン大学を定年退職されたあと、三ヶ月間関西学院大学神学部の客員教授として日本に滞在され、ここ西南学院大学神学部でもマタイ福音書に関する特別講義をしてくださった先生であり(そのときの通訳は須藤伊知郎助教授)、

あの分厚い『EKK マタイ福音書注解書』の全四冊を書き上げられたことでとくに著名な先生である¹⁾。先生は当時私が留学先として希望していたスイスのチューリッヒ大学で博士号を取得された方であり、しかも先生のその博士論文は、私もまた師事することを希望していたE・シュヴァイツァー先生によって、同時に教授資格論文(Habilitationsschrift)としても認められたという、他に類を見ないような優れた論文であった²⁾。私は当時日本滞在中の先生には何かとご指導をいただいていたので、NCCにおける最終試験に合格したことをご報告したわけである。留学試験の中にはドイツ語読解やドイツ語の口頭試問などもあるにはあったが、しかし当時の私のドイツ語の能力は極めて不十分なものだったので、英語での報告のほうがはるかに簡単ではあったのだが、しかしルツ先生はどんなに拙くてもドイツ語を話すように指導してくださったので、ドイツ語でご報告した。そのとき先生は大変喜んでくださって、“Das ist grossa!”と何回も繰り返して言ってくださったのであるが、それが「それはよかった」という意味の言葉で、英語で言えば“*That's great!*”に相当するものであることは容易に想像できたのだが、しかしその *grossa* が正確にどういう意味の単語なのかはどうしてもわからず、辞書にもそのような単語を見出すことはできなかった。当時私は大事な電話の場合には、ゴム製の集音マイクをペタリと受話器につけてそのやり取りを録音するということをしていたので、何回も何回もその電話でのやり取りを聴き直したのであるが、何度聴いてもそれは *grossa* としか聞こえなかった。Das ist prima! という言い方があるのは知っていたので、同様に語尾が -a となる Das ist grossa! という言い方もあるのかもしれない、あるいはそれは、もしかしたらスイス独特の言い回しなのかもしれない、ぐらいにしか考えることができなかった。しかし実際にスイスに行ってみても、そのような言い方を耳にすることはまったくなかった。

さて1978年3月に、5年半かかって博士論文を書き上げたのちに帰国して、

1) そのうちの1-3巻は、すでに小河陽氏の翻訳によって教文館から出版されている。

2) U.Luz, *Das Geschichtsverständnis des Paulus*, München 1968.

直ちに4月から、当時は干隈にあった西南学院大学神学部に奉職することになったのであるが、いつごろであったか、引越しの荷物を整理していたときに、ふとこの grossa のことを思い出したので、当時の録音テープを捜し出して確認してみた。するとどうだろう。それは grossa ではなくて、はっきりと、しかも繰り返して、grossartig と言われているのではないか。それは「偉大だ、すばらしい、すごい」という意味の形容詞であり、もちろん辞書にも載っている普通の単語であるが、私には語尾の -artig の a を除く部分がまったく聞こえなかったのである。よく聞けば明確にそう言われているにも拘わらず、である。当時の私は、ドイツ語に関してはまったく「聞く耳」を持っていなかったのである。

それと同じことが、たぶん、「聴覚」ではなくて、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）のうちの別のものにも、さらには、その五感以外の「感覚」、例えば、「心の感覚」とか「霊的な感覚」などにも、当てはまるかもしれない。つまり、「超越者」なる「神」が私たちに働きかけられるとき、それをどのくらい私たちは「感得」「体得」できているのだろうか、むしろその働きかけに対して「無感覚」になっていることがしばしばあるのではないだろうか、ということである。

私は常々、「追体験」することの大切さを強調してきた。つまり、わたしたちに追体験できないような超越的な出来事だとしたら、それはほとんどまったく意味がない、という趣旨のことを強調してきた。つまり、そのような超越的な出来事が「ない」というのでは決してなく、むしろ超越者なる神は人間をはるかに越えた存在であるはずだから、それは、われわれ人間が「感得」できるできないに関わらず、「ある」にちがいないのだが、しかし、もしもそれが人間に「知覚」できず、「理解」もできず、「追体験」もできないようなものならば、まったく何の意味もないだろう、と。

もちろん、私に固有の限界性のゆえにそれを私が「追体験」できないというのであれば、つまり私が「聞く耳を持たない」ということが原因で聞くことができない、というのであれば、それは私自身の責任なので、その限りで

私は「超越者」を「私のサイズ」に矮小化しないように常に注意しなくてはならないのだが、そのことはよくよく抑えた上でなお、「追体験」の大切さは強調されなくてはならない、と私は主張してきた。そして、イエス・キリストの「受肉」という出来事は、超越的な出来事がわれわれ人間にもまさに「追体験」できるということを目指しての出来事であったのだ、と私は考えている。

その「追体験」の典型、極致、すなわち究極的な形は、おそらくパウロの、ガラテア2・20の「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちで生きておられるのである」という文言が指し示している現実であろう。なぜならば、「キリストが私のうちで生きておられる」と告白できるほどに、パウロはキリストを「追体験」できているのだからである。そしてそれは、「超越」が「内在」しているという現実以外の何物でもないであろう。

ここにおける「私のうちで」はギリシア語では *en emoi* であるが、それとまったく同じ言い方は、すでにこのガラテア書の少し前の1・16で、パウロが神からの「御子の啓示」について語る文章の中にも登場する。15-17節を私の岩波訳から引用しておこう。<(15節) しかし、私の母の胎〔の内にいる時〕から私を選び分かち、その恵みをとおして私を召された方〔すなわち神〕が、〔次のことを〕よしとされた時、(16節)〔すなわち〕神の御子を私が異邦人たちのうちに〔救い主として〕告げ知らせるために、御子を私のうちに (*en emoi*) 啓示することを〔よしとされた時〕、私はただちに血肉に相談することはせず、(17節) またエルサレムにのぼって私よりも前に使徒〔となった人〕たちのもとへ〔赴くことも〕せず、むしろアラビアに出て行き、そして再びダマスコスに戻ったのである。>

ここでまず注目すべきは、パウロが自らの「召命」について彼自身の書簡において明確に語るこの唯一の箇所、パウロはそれ自身を主題化するのはまさになく、むしろ他のことがらを言うためにそれに言及することが必要であったからというだけの理由でそれに言及している、という事実である。これはルカが伝える使徒行伝9、22、26章における三回に亘る詳細なパウロ

の「回心」についての記述と比較すると、極めて顕著な相違である。それは書簡における記述だから、という理由だけではおそらくなく、パウロという人は自らの「回心」を主題化して、たとえ神を主語にして語るのだとしても、得々としてそれについて語るような人ではなかった、ということを示しているであろうと思われる。

それはともかく、今朝のわれわれのテーマである「超越」と「内在」ということに関係する上述の en emoi は、しばしば「私に対して」というふうに訳される（新共同訳は「御子をわたしに示して」）。つまり、「われわれの外側で」（extra nos）存在している神こそが、「私に対して、私に向かって、私のために」（pro me）働かれるのだということを強調したい人たちの解釈である。しかしそのような解釈は、2・20における en emoi とは合致しないであろう。私は1・16を「私のうちに」と訳出したが、しかし en emoi は「私のうちにおいて」と訳したほうがよいほどの語り方になっている、と言ったほうが正確であろう。この点についてはのちに、八木誠一先生の主張との関連の中でさらに言及することにする。

ところでガラテア2・20は、八木誠一先生が先生の著書『新約思想の構造』³⁾の中でも強調されている、新約思想の中心だと先生が捉えておられるパウロの文言である。そのような、「キリスト」が自分の内で生きておられるという現実のことを先生は「自己」と言い表わし、その現実を生きている自分のことを、先生は「自己・自我」と表現され、そのような内なる「キリスト」の自覚のない自分のことを、単なる「自我」と表現されている。

しかし私は、日本新約学会の機関誌『新約学研究』29号⁴⁾において、のちの上で言及した先生の著書の中にその中心をなす部分として収められた論文「新約思想の構造分析」（『日本の聖書学』5号、1999年）の「論評」の中でも八木先生に対して言わせていただいたのだが、その「我が内なるキリスト」とは、直前のガラテア2・19b が示しているとおり、つまり、過去において

3) 岩波書店、2002年。

4) 2001年、60-67頁。

完了した動作の継続を強く表わす現在完了形でもって言表されている「私はキリストと共に十字架につけられてしまっている (Christō synestaurōmai)」との文言が示しているとおおり、「(私と) 共に十字架につけられてしまっている」「キリスト」のことを指しているのだ、ということがもっと深く抑えられなくてはならないのではないか、と考えている。これは、例えばローマ6・6の「私たちの〔うちの〕古き人間は、この罪のからだが壊されるために〔キリストと〕共に十字架につけられたのだ」との文言において、過去の一回的な行為を指すアオリスト形で語られる「共に十字架につけられた」(synestaurōthē) が示しているような、主として「罪からの解放」というような意味における新しい歩みを指示しているというよりも、むしろ、同じガラテア書の6・12の「キリストの十字架を宣教することによって迫害される」という言葉が示しているような、「十字架の宣教」ゆえの「具体的な苦難の生」を生きるただ中での信徒の生の在り様についての発言となっている。(もっとも私は、ローマ6章においても、実際にはこの「具体的な苦難の生」のことは深く抑えられている、と解釈をしているが⁵⁵⁾。) ガラテア6・14では、再び現在完了形でもって、「キリストをとおして、世界は私に対して、私も世界に対して、十字架につけられてしまっている」と言われているし、6・17では、パウロの「十字架」理解と大いに関連すると思われる仕方で、「私は、イエスの焼き印を私のからだに負っている」と言われているが、こうしたパウロの用法からして明らかなように、パウロの「十字架」理解は、この具体的な苦難の現実を生きる信徒の実存と結びついていたのであり、それゆえに、ガラテア2・20で言われている「超越者」の「内在」を示す現実は、そのような「十字架」理解と切り離して考えられてはならないのである。

残念ながら八木先生は、私のこのような指摘の中にある「十字架の逆説」の強調にはあまり興味を示してくださらないのであるが⁵⁶⁾、しかし、パウロの「十字架」理解に関する私の年来の主張、そしてそれはルターの「十字架の神学」に通底しているのであるが、その主張は、今朝の聖書の箇所である

5) 拙著『「十字架の神学」の成立』、ヨルダン社、1989年、37頁以下参照。

6) 上掲『「十字架の神学」の成立』、62頁以下の八木誠一氏への批判的対論を参照。

第二コリント13・3以下に関して私が以下に述べることも、大いに関連していることがらである。

今朝の聖書の箇所のうち、第二コリント13・3によれば、コリント人たちのうちの何人かは、「パウロのうちにあって」キリストが語っているということの「証拠」を求めていたようである。なぜならば、彼らはパウロについて、「手紙は重厚で力強いが、からだごと現われると(hē parousia tou sōmatos)弱々しく、言葉は軽蔑されている」(10・10)と考えていたからである。13・3の全体をどう訳すかという問題については以下に述べることにするが、いずれにしてもパウロは、そのような「証拠」の要求に対しては、13・4で、「事実、キリストは弱さのゆえに十字架につけられたが、しかし彼は〔今〕、神の力によって〔力強く〕生きておられるのである。そして私たちがまた、キリストにあって弱いのだが、しかし、あなたがたに対しては、彼と共に、神の力によって、〔力強く〕生きることになるであろう」と答えている。「そして私たちがまた」という言い方は、パウロがキリストを、まさに上で述べたように「追体験」していることを明示している。それは、しばしば私が強調している第一コリント2・1と2・3の冒頭における「私もまた」(kagō)という言い方と深く通底しているものである⁷⁾。

新共同訳は、「そして私たちがまた、キリストにあって弱いのだが」の部分を、「わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者ですが」と訳しているが、これはとてもよくない訳だと私は考えている。「キリストにあって」(en Christō、英語のin Christ)をほとんどの場合に「キリストに結ばれて」というように新共同訳が訳したのは、カトリックのフランシスコ会聖書研究所の神父であられた故堀田雄康氏の主張が突出した形で反映されたからである(あまりにも多くの箇所における『フランシスコ会訳新約聖書』⁸⁾と新共同訳の一致に注目せよ!)。現在は釜ヶ崎で労働しながら司祭を務めておら

7) 拙論「弱いときにこそ——パウロの「十字架の神学」——」『聖書を読む』(新約篇)(共著)所収、岩波書店、2005年、80頁以下、拙著『「十字架の神学」の展開』、新教出版社、2006年、161頁以下参照。

8) 中央出版社、1979年。

れる本田哲郎神父もまた、フランシスコ会聖書研究所で堀田神父とともに新約聖書の翻訳に携われ、さらに新共同訳聖書の翻訳委員でもあられたのだが、しかし現在の本田哲郎神父は、ご自身の『小さくされた人々のための福音』⁹⁾などにおける翻訳と比べれば一目瞭然であるが、「新共同訳はまったくダメな翻訳である」と、私には個人的に話しておられる。

なぜ「キリストにあって」のこのような訳出がよくないかと言えば、「キリストに結ばれて」と訳されておれば、誰もがそこでは「結ぶ、結ばれる」という動詞が使われていると思ってしまうだろうと思うのであるが、原文にはそのような動詞はまったくないからであり、さらにそれは「キリストにおいて、キリストにあって」という言い方についてのひとつの、しかも極めて「狭い」解釈でしかないからである。

2006年の日本新約学会機関誌『新約学研究』(34号)¹⁰⁾において、八木誠一先生は、2005年の新約学会での研究発表内容を「新約聖書の場所論と誤訳だらけの新共同訳」と題してまとめておられるが、その中で第二コリント13・3について次のように述べておられる。すなわち、<[直訳の]「わたしのなかで語っているキリスト」はキリストがパウロの真実の(超越的内在的)主体であることを意味する(作用的)一>。[新共同訳の]「キリストが私によって語っている」では、パウロがパウロとは別人格のキリストの根拠だということになりかねない>(47頁)。要するに新共同訳は、<場所論的テキストを人格主義的言語に「翻訳」する傾向がある。これは聖書解釈の上ではなほだ問題であるといわなければならない>(33頁)。

そして、すでに私が上でふれたガラテア1・16(八木先生の直訳は「御子(イエス・キリスト)を異邦に宣べ伝えよと、私のなかに(en moi)露わならしめることをよしとされた方(神)が……」)を、新共同訳が「神が、御

9) いずれも新世社からの出版で『(上)／(下)』ともに1998年。その後に『コリントの人々への手紙』(2000年)、『ローマ／ガラテヤの人々への手紙』(2001年)、そして『パウロの「獄中書簡」』(2004年)が出版されている。

10) 32-48頁。八木誠一氏は、最近の『場所論としての宗教哲学——仏教とキリスト教の交点に立って——』、法蔵館、2006年12月、49頁以下において、新約聖書における場所論をさらに論じておられる。

心のままに、御子を私に示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき……」と訳していることについて、次のような指摘をされている。

＜問題は「en emoi」の訳である。上記のテキストは現在、多くの訳また注解書で「私に対して」と訳されている。たしかに語学的にはこの訳は可能である。しかし直後の2・19には「もはや生きているのは私ではない。キリストが私のなかで（エン・エモイ）生きている」とあり、私の「なか」に露わとなったキリストが、それ以来私の「なか」で（私の真実の主体として）生きていると解するのが当然である。実際、2・19を「もはや生きているのは私ではない。キリストが私に対して（エン・エモイ）生きている」と解したら意味をなさないから、新共同訳も — 多くの訳も注解書も — ここは「キリストがわたしの内に生きておられる」というように訳している。……問題はエン・エモイを「私に対して」と訳するのは人格主義的な言葉使いだということである。神が御子を「私に対して」現わした（新共同訳の「私に示した」も同様にとれる）というとき、ここには「キリスト」が — 幻によるにせよ他の何によるにせよ — パウロに対向する人格的存在としてパウロという一人格に顕現した、という意味になる。……いずれにせよ、キリストという「人格」存在が私という「人格」の「なかに」現われるのは考えがたい、という感覚がある＞(42-3頁)。

八木先生の以上の指摘は、すでに上で私が言及したこととまったく軌を一にしている。八木先生はさらに、第二コリント4・6にも言及されて、＜パウロは「神は我々のこころのなかで輝いて、キリストのみ顔のなかにある神の知識を照らし出した」ともいうが、これは回心体験（キリスト顕現）と関係の深い記述である＞(43頁)とだけ言われているが、「神は我々のこころのなかで輝いて (hos elampsen en tais kardiais hēmōn)」との八木先生の訳は、私の岩波訳の「私たちの心を照らしてくださった」と比較すると、神の「われわれの心の中における内在」をより明瞭に言い表わしていることになる。lampōを「輝く」ととるか「照らす」ととるかにもよるが、ともかく「私たちの心において」(en tais kardiais hēmōn)を私のように単に「心を(照らす)」と訳してしまったら、神の「内在」の契機を軽視してしまう可能性があるの

は事実である。この点では口語訳は私の訳と類似していて「わたしたちの心を照らしてくださった」と訳しており、新共同訳は「神は、わたしたちの心の内に輝いて」と八木氏に近い訳をしている。しかしいずれにしても、このパウロの「心」における「神認識」あるいは「キリストの面にある神の栄光の認識」についての発言は、直後の第二コリント4・7以下において「この宝」と表現されつつ、次のような、私の言葉で言えば「十字架の逆説」をパウロが語っている文脈へと直ちに接続しているということは、決して看過することができないであろう。

<(7節) さて私たちは、この宝を (!) 土の器の中にもっている。それは、力の卓越が神のものであって、私たちから [出た] ものではない [ことが明らかになる] ためである。(8節) 私たちは、すべてにおいて苦しめられながらも、窮地に追い込まれてはおらず、途方にくれながらも、絶望してはおらず、(9節) 迫害されながらも、見棄てられてはおらず、投げ倒されながらも、滅ぼされてはおらず、(10節) 常にイエスの殺害をこのからだに負って [歩き] まわっている。それはイエスの生命もまた、私たちのこのからだにおいて明らかにされるためである。(11節) なぜならば、私たち生きている者は、イエスのゆえに、常に死へと引き渡されているのだからである。それは、イエスの生命もまた、私たちの [この] 死ぬべき肉において明らかにされるためである。>

このことは、すでに上で私が八木先生に対する批判として言及した、ガラテア2・20の「我が内なるキリスト」とはまさに直前の19節が語っている「(私と) 共に十字架につけられてしまっている」「キリスト」以外ではないということの指摘と同様に、極めて重要な神学的な、そしてキリスト論的な認識を語っていると言わなくてはならないであろう。なぜならば、そのような神を、あるいはキリストを認識することは、そしておそらくは八木氏が言われるとおりに「回心」を体験するということは、ということはずなわち「キリスト顕現」を体験するということは、このような「十字架の逆説」を体験することと密接不可分離のことがらだったのだ、ということの意味しているからである。

ついでながら新共同訳の翻訳についてさらに言えば、パウロ書簡の翻訳部分においては、「です、ます」調を基調としているにも拘わらず、「である」調の恣意的な混在がかなりしばしば見出される。

一例として、比較的短いガラテア書の新共同訳の訳出を検討してみよう。

1・3の「私たちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように」は、すぐあとの1・5の「わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように」という丁寧言葉との間の整合性を明らかに欠いている。「です、ます」調だと言うのなら、後者のようになるべきであるのは言うまでもない。しかし、同様の祈願は、6・16で「神のイスラエルの上に平和と憐れみがあるように」、6・18で「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように」と不適切に、つまり「である」調で訳出されている。

1・8-9の二回の「呪われるがよい」も、決して「です、ます」調ではない。

3・1-2の「だれがあなたがたを惑わしたのか。目の前に、イエス・キリストが十字架につけられた姿ではっきり示されたのではないか。あなたがたに一つだけ確かめたい」の傍点部分も、「です、ます」調ではない。パウロが感情的に高揚しているとしても、それをこのようにこの部分だけ別様に訳してよいわけではないであろう。実際、第二コリント10-13章のいわゆる「涙の書簡」の中の、さらに一層感情的な文章のすべてが、そのように訳出されているわけではない。

3・7の「わきまえなさい」や、5-6章に何度も出てくる同様の命令文(5・1「しっかりしなさい」、5・13「互いに仕えなさい」、5・15「注意しなさい」、5・16「歩みなさい」などなど)は、4・12の「あなたがたもわたしのようになってください」という丁寧言葉との間の整合性を保ってはいない。

3・19「では、律法とはいったい何か」、

3・21「決してそうではない」、

- 4・15 「いったいどこへ行ってしまったのか」、
- 4・20 「語調を変えて話したい」、
- 5・12 「いっそのこと自ら去勢してしまえばよい」、
- 5・15 「だが」、なども、すべて「です、ます」調ではない。

同じことをパウロ書簡の全般に亘って調べてみれば、その恣意的な訳出の例は枚挙に暇がないほどである。

因みに、この列举の冒頭でふれた「祝祷」との関連で言えば、牧師が礼拝の最後に祈る「祝祷」も、こうした新共同訳と同様の「です、ます」調と「である」調の、さらには文語体と口語体の混合であることが多い。「仰ぎ乞い願わくは」あるいは「願わくは」と文語体で始めながら、最後には「あるように」あるいは「ありますように」という口語体になっていることが多い。しかし、新共同訳の、このようにひどく、そして恣意的な翻訳を、公けの礼拝で、読まされ、また聴かされている信徒は、実に気の毒としか言いようがない。パウロは、第二コリント11・20において、<あなたがたは、誰かがあなたがたを奴隷にしても、誰かが〔あなたがたを〕食い倒しても、誰かが〔あなたがたを〕捕らえても、誰かが高慢になっても、誰かがあなたがたの顔を殴打しても、〔それらすべてを〕忍んでいる……。私は恥じ入って言うが、私たちは〔あまりにも〕弱々しくなってしまったようだ>、と語っているが、ほとんど同じことをパウロは、新共同訳を強制的に読まされ、聴かされている者たちに対して言うかもしれない、と私は思っているほどである。

元に戻って、なぜ、第二コリント13・4の en Christō (ただしここ4節では「キリスト」は代名詞「彼」でもって言い表わされていて en autō となっているが) は、その言葉どおりに訳されなくてはならないのか。それは、コリント人たちの何人かは、「キリストがパウロのうちにあって」語っていることの「証拠」を求めているのだが、しかしパウロはむしろ、「私たちこそがキリストのうちに存在なのだ」、とここでは言っているのだからである。しかも、すぐ前の12・9に記されているような、肉体にとげが与えら

れていたパウロに対して復活のキリストが語ったとされている逆説的な言葉、すなわち「私の恵みはあなたにとって十分である。なぜならば、力は弱さにおいて完全になるのだからである」との言葉を考慮に入れれば、「弱さのゆえに十字架につけられたが、否、弱さのゆえに十字架につけられたからこそ、今は神の力によって力強く生きておられる」、そのような「キリストのうちに」あって、「私たちもまた弱いのだが、しかし、あなたがたに対しては、彼と共に神の力によって力強く生きることになるであろう」とパウロは語るのである。つまりパウロたちは、その逆説のゆえに、そのような「キリストのうちにあって」事実弱いのだが、しかし、キリストが「パウロのうちにあって」語っていることの「証拠」を求めている「あなたがたに対しては」少なくとも、キリストと共に、神の力によって、力強く生きることになる、というのである。

しかしここで、新共同訳においても口語訳においても見られる、さらに重大な誤訳の可能性について述べなければならない。それは、13・3の後半をどう翻訳するかという問題である。

説教なのに、話が講義のようになってしまっていて恐縮であるが、しかし、皆が皆私の「新約釈義」の講義を受けてくれているわけではないので、敢えてさらになりに細かい話をしたいと思う。余談になるが、教師というものは、おそらく総じて、誰が自分の講義を受けていて誰が受けてはいないかということに対しては、かなり敏感であり、かなり正確にそのデータはインプットされているものだと思う。そして私などは、ある牧師が牧会に出て失敗したりすると、やっぱりあの牧師は僕の「新約釈義」の講義を受けていなかったからなあ、と思い、講義を受けていた者が失敗したりすると、何で僕の講義を受けていたのに、などと考えたりする。他の科目と比較してどうこう言うのではなくて、それ自身として言えば、聖書学という学問は、自分が今捉えている捉え方は多くの解釈の中の一つでしかないことをこれ以上ないほどに明確にしてくれるものなので、一時たりとも自分の解釈を絶対化することに対しては、最も明確な警告をなしてくれる科目であるように思うからである。

もっともこれは私の勝手な思い込みであって、他人はまったく別様に考えているようであり、例えば、バプテスト連盟の中ではかなり名前の知れたある女性信徒は、ある牧師が万やむをえず離婚したところ、やっぱりね、あの人の指導教授は青野先生だったからね、と言われたそうである。どのようにしてそのような論理展開が可能になるのかは、私の勝手な思い込みと同じほどに不明であるように私には思われるが、ともかく人の受け止め方はさまざまである。

そんなことはともかくとして、第二コリント13・3では、「弱くはなくて強い」キリストなのか、それとも「弱いときにこそ強い」キリストなのか、どちらが語られているのであろうか。

新共同訳はここを、「なぜなら、あなたがたはキリストがわたしによって（わたしによって）」という訳が問題であることについては、すでに上で八木誠一先生の指摘を紹介した）語っておられる証拠を求めているからです。キリストはあなたがたに対しては弱い方でなく、あなたがたの間で強い方です」と訳している（口語訳も他の日本語訳もほとんど同じ）。しかし、「弱くはなくて強い」という言い方は、すでに上でふれた、直前の第二コリント12・9の「力は弱さにおいて完全になる」や、12・10の「私が弱い時、その時にこそ私は強いのだ」という「逆説」とは、まさに正反対の「非逆説的」な語り口になってしまっているのだが、パウロはほんとうにそう言っているのだろうか。例えば手許の英語訳の New King James Version は、“Since you seek a proof of Christ speaking in me, who is not weak toward you, but mighty in you.”と訳しているが、この訳出は、ギリシア語原典の、少なくとも文章構造は正確に訳出している。そして、もしも関係代名詞 who 以下の文章を、前文と切り離して訳すと、新共同訳や口語訳などのようになるのだが、関係代名詞 who 以下を切り離さないで直前の Christ に繋げて訳すとどうなるのであろうか。私は岩波訳において後者の可能性を採用して、「なぜならば、あなたがたに対して弱くはなくてむしろあなたがたのうちにあって力ある者であるキリストが、私のうちにあって語っておられる、という証拠を、あなたがたは熱心に求めているからである」と訳出した。who の前にコンマが付され

ており、「コンマ・フーは切り離して訳しなさい」というように高校の英語では習った記憶があるし、ギリシア語原典でもネストレーアランド27版を始めとしてほとんどの校訂本が関係代名詞 *hos* の前にコンマを付しているが、しかしコンマなしの関係代名詞 *hos* の読みが採用されている箇所（ローマ 3・30、5・14、第一コリント15・9）を検討してみても、必ずしもコンマがある場合とは異なる繋がりが考えられているようにも思われない。

さらにまた、重要な大文字写本においても、そしてもちろんパウロが実際に書いた（あるいは口述筆記させた）書簡そのものにおいても、句読点はまったく書き記されていないので、コンマのあるなしが解釈に影響を及ぼすことはまったくないのであろう。それゆえに、この箇所の翻訳は、文脈、そしてパウロの神学思想全体を考慮する中でなされる以外に方法はないであろう。そして、すぐ前に12・9-10が語られているという文脈も、パウロの神学の根幹をなすと私が考えている「十字架の神学」も、ともにこのキリストに懸かる関係代名詞を切り離さずに結合させて訳すという可能性のほうを指し示している、と私は考えている。実際、もしも私の訳出が正しければ、「弱くはなくて強い」という「直接的で非逆説的なキリスト理解」は、実はコリント教会のパウロの反対者たちの理解だったことになるのだが、それは、10・1の「あなたがたの中であって面と向かっては卑屈であるが、離れているとあなたがたに対して強気になる私パウロ」とか、10・10の、すでに上で引用した「手紙は重厚で力強いが、からだごとと現われると弱々しく、言葉は軽蔑されている、と人は言っている」とのパウロの文章の中に見られるパウロの論敵たちの、明確に「直接的で非逆説的なキリスト理解」と合致している。現に、H・ヴァインディッシュ、R・ブルトマン、W・マルクスセン、E・ギュットゲマンス、P・ジーバーなどは、この関係代名詞を切り離さずに、明確にパウロの論敵の言葉として捉えている。さもなければ、復活のイエスの「力は弱さにおいて完全になるのだ」との言葉のゆえに「弱いときにこそ強い」と語ったパウロが、その直後に「キリストは弱くはなくて強い」と語っていることになってしまい、文脈はズタズタに切り裂かれてしまうことになるであろう。パウロがここで、「あなたがたに対して (*eis hymas*) 弱くはなく、

むしろあなたがたのうちであって (en hymin) 力ある者であるキリスト」と傍点部に強調をおきながら語っているのは、ちょうどすぐ上で引用した、パウロの論敵の言葉が引用されていることが明らかである10・1の、「あなたがたの中であって (en hymin) 面と向かっては卑屈であるが、離れているとあなたがたに対して (eis hymas) 強気になる私パウロ」において傍点部が強調されていることとまったく同じである (新共同訳・口語訳は10・1の「あなたがたに対して」を省略してしまっている!)。私は岩波訳で、10・1を「あなたがたの中であって」と訳し、13・3を「あなたがたのうちであって」と訳してしまったが、二つはまったく同一に訳されるべきであった。13・3bをパウロの論敵に帰さなければならない他の論拠については、また上で言及した研究者たちの諸文献に関しては、私の著書¹¹⁾を参照していただきたい。

いまひとつ、今朝の聖書の箇所との関連で、新共同訳においても口語訳においても、重要な翻訳の問題がある。それは、13・5の「(あなたがたは) 信仰を持って生きているかどうか自分を反省し、自分を吟味しなさい」(新共同訳)、「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい」(口語訳)についてである。なぜならば、ギリシア語原典では、「信仰を持って生きている」とか「信仰がある」というような言い方はまったくなされていないからである。ギリシア語では実際には、「あなたがたが信仰のうちにあるかどうか (ei este en tē pistei)、あなたがたは自分自身を検証しなさい (heautous peirazete)。自分自身を吟味しなさい (heautous dokimazete)」と書かれている。つまり、ここで言われている「信仰」とは、決して私たちの所有物などではないのである。むしろ、私たちがその中に置かれているもの、つまり大きく広く神が、あるいはキリストが与えてくださっている現実としての pistis、「信仰」、「真実」が意味されている可能性が大きいと思われるのである。しかもその「信仰」とは、果たして私たちが、「弱さのゆえに十字架につけられたキリスト、またそれゆえにこそ神によって復

11) 前掲『「十字架の神学」の成立』、48頁以下、前掲『「十字架の神学」の展開』、180頁以下参照。

活させられた、そのような方としてのキリスト」を信じる信仰であるのかどうか、あなたがたはそのようなキリストによって明らかにされている神の現実、神の真実（8節には「真理 (alētheia)」という言葉が登場するが）の中に置かれているのかどうか、よく吟味してみなさい、とパウロは語っているのだと思われるのである。

この「吟味せよ」という言葉に関連して言うならば、第一コリント14・26以下においてパウロが「異言」と「預言」について語っていることがらに注目しないわけにはいかない。まさに「神の啓示」に基づいている「預言」、そしてその「預言」を誰もがなすことができるのだとパウロは31節で語るのだが（新共同訳は「一人一人が皆、預言できるようにしなさい」と命令形に訳しているが、よくない）、そのような「預言」をも「互いに吟味しあいなさい」とパウロは語っているのである。「神の啓示」に基づく「預言」すらもそうなのだ、と。超越者が「外側から」与えてくださる「啓示」も、私たちの「内側において」初めて私たちにとっての意味を獲得するのだから、誰一人それを絶対化することはできないのだ、「預言する者たちの霊は預言をする者たち〔自身〕に従属する」（32節）、すなわち、預言者の霊的なインスピレーションは預言者の自我に従属しているのだ、だからそこでは、徹底した相互吟味がなされなくてはならないのだ、とパウロは言っているのである¹²⁾。

しかしキリストを非逆説的に、「弱くはなくて強い」と強弁しながら、パウロのなかにはそういうキリストはいないと断言するような、そして自らの理解をあたかも超越者そのものからの直接的な理解だと捉えているようなコリント教会のパウロの論敵たちは、「失格者 (adokimoi)」（5節）、つまり吟

12) 20年以上も前になるが、同じく神学部のチャペルにおける説教でこの第一コリント14・26以下をテキストにして私が以上のような内容を語ったときに、聖書学の専門ではない(!)一人が、冷笑しながら、「細かいことをゴチャゴチャ、ゴチャゴチャ言って」と「批判」してくれた言葉が、今もなお私の耳に残っているが、こういう場合にこそ、「彼は言った」はギリシア語では、第二コリント12・9におけるのと同様に、現在完了形において言い表わされなくてはならない。もっともそのニュアンスの肯定的と否定的との相違は大きい。またこの「批判」が果たして「聞く耳」を持った者の批判であったのかも明らかではない。

味に耐えられない者、検証に耐えられない者となってしまう。この a-dokimoi が同じ5節の「吟味しなさい」(dokimazete)を受けた言葉であるのは明白である。しかしパウロの最終的な言葉は重要である。「あなたがたは、自分自身を認識しないのか。すなわち、イエス・キリストが〔まさに〕あなたがたのうちに〔おられる〕ということ。もしも認識しないのなら、あなたがたは失格者である。しかし、私たちは失格者〔など〕ではないのだ、ということ。あなたがたが承知しているよう、私は希望する」とパウロは5-6節で語る。なぜならば、まさにキリストが「私たちのうちにおられる」という事実が厳としてあるのだから。

つまり「弱さのゆえに十字架につけられたキリストのうちにあって、同様に弱い、そういう私たちのうちに、実はキリストがおられるということ。認識するように」、というのである。弱さのゆえに十字架につけられた「キリストのうちに」私たちはあるのだが、そしてそのキリストのうちにあって弱いのだが、その弱い「私たちのうちに」実はそのキリストが「内在」してくださる、というのである。十字架のキリストをとおして「超越者のうちに」私たちが置かれる時、そのとき「超越者」は「私たちのうちに」「内在」してくださる、というのである。しかもその「内在」をとおして、再び「超越者」が、私たちの通常の思考をはるかに越えた「超越者」そのものであられるということ。明らかにしてくださる、というのである。つまり「超越者」なる「神」は、まさに弱さのゆえに十字架につけられたキリストをとおしてこそ働かれるのだという、驚くべきメッセージ、私たちの通常の思考をはるかに越えた「超越者」自身に関する思考を、私たちに与えてくださるのである。そのような「超越者」なる「神」に、そして十字架のキリストをとおして自らを十全な形で明らかにされていくそのような「神」に、私たち自身を委ねて生きていきたい、と切に祈るものである。

最後に、果たして私たちの「信仰」とは、私たちが「弱さのゆえに十字架につけられたキリスト、またそれゆえにこそ神によって復活させられた、そのような方としてのキリスト」を信じる信仰であるのかどうなのか、という

ことが問われているのだということとの関連で、ルターの『慰めと励ましの言葉——マルティン・ルターによる一日一章——』¹³⁾を読んでいて驚嘆した事実があるので、それについてふれることで、この説教を終わることにしたい。パウロの「十字架の神学」をルターはまれに見る仕方でも継承していること、すなわち、「十字架」という名詞、あるいは「十字架につけられる」という動詞を、決して直接的に救済論的な意味において用いることはしないこと、したがって「十字架」の用語と「贖罪論」とを直接的にはまったく結合させないこと、むしろパウロもルターも、「弱さ」「愚かさ」「躓き」「(律法による)呪い」としてさしあたっては否定的に理解される「十字架」を、逆説的な意味においてのみ肯定的に、「強さ」「賢さ」「救い」「祝福」として解釈すること、などについて、私は繰り返し指摘してきたのだが、ルターは上掲書の4月28日の文章において次のように語っているのである。扱われている聖書の箇所は、ヨハネ黙示録1・5-6の「キリストはわたしたちを愛し、ご自分の血によって罪から洗いきよめ解放し、わたしたちを王とし、ご自身の父である神の前に祭司としてくださった」であり、ふつうに読めば極めて「贖罪論」的な内容をもった箇所以外ではないのであるが、しかしルターは、驚くべきことに次のようにしか語らないのである。

＜信仰者が立派な王であるのは、金の冠を頭に載せているからでもなく、金の笏(しゃく)を手を持っているからでもなく、絹やビロードや金の刺繍の衣裳や、紫の衣を着て悠々と歩くからでもない。

彼らが本当にすばらしいのは、死や悪魔、地獄やあらゆる不幸の上に立つ主人だからである。彼らにとっては、死は命であり、悪魔はわら人形であり、罪は義、不幸は幸運、貧は富である。それは、彼らがあらゆるものの主人であると同時に、彼らは神のものであって、神を友として、いや、愛する父としてもっているからであり、彼らは富や立派な宝物やあらゆる財貨や、心の充満を何によって見いだすかを誰にも尋ねない。

それゆえ、どんな罪も死も悪魔も、飢えも渴きも、寒さも暑さも、剣もあ

13) 徳善義和監修・湯川郁子訳、教文館、1998年。

らゆる不幸も、彼らを傷つけることはない。いや、彼らは、はるかにそれを乗り越え、すべてにおいてその逆を見いだしている……貧しさの中に豊かさを、罪の中に義を、恥の中に大きな名誉を、飢えと渇きの中にすべての充満を。>¹⁴⁾ (2007.1.24)

14) 123頁。